

地球惑星科学委員会SCOR分科会SIMSEA小委員会（第25期・第1回）

議事要旨

1. 日 時 令和3年3月9日（火）9：30～11：00

2. 会 場 遠隔会議（zoom利用）

3. 出席者（敬称略）

植松 光夫、齋藤 文紀、張 勁、八木 信行、山形 俊男、遠藤 愛子、大塚 耕司、
小埜 恒夫、郭 新宇、川辺 みどり、小松 輝久、齊藤 宏明、角田 智彦、仲岡 雅裕、
灘岡 和夫、古川 恵太、牧野 光琢、宮澤 泰正、森岡 優志、柳 哲雄、横木 裕宗、
脇田 和美

4. 議 題

（世話役・山形委員による冒頭挨拶）

（1）委員長の選出

（委員紹介）

（2）副委員長・幹事の選出

（3）議事要旨の提出に関する委員長一任について

（4）小委員会委員間のメールアドレス共有について

（5）SIMSEA および SIMSEA 小委員会の設立の背景・経緯の説明

（6）SIMSEA 小委員会の活動方針の議論・決定

（7）今後の小委員会活動の進め方・大まかなスケジュール

4. 配布資料

資料1：SIMSEA 設立の背景・経緯に関する説明スライド（山形委員）

資料2：「フューチャー・アースと国連海洋科学の10年」（海洋白書より、山形委員）

資料3：SIMSEA 小委員会委員への事前アンケート集計結果

5. 議事内容

（世話役・山形委員による冒頭挨拶）

第1回会合の開催にあたって、冒頭に、これまで小委員会の設立・取組みをリードしてこられた山形委員より挨拶が行われた。日本学術会議での海洋分野の取組みの経緯や SCOR 分科会および本小委員会の概要が紹介された

（1）山形委員より、本小委員会の新しい委員長として灘岡委員が推薦され、出席者が了承した。その後の進行は、灘岡新委員長に一任された。

(委員紹介)

灘岡委員長の進行により、参加者の自己紹介が行われた（児玉委員と山野氏は欠席）。また、自己紹介後に集合写真の撮影（スクリーンショット、別添）を行った。灘岡委員長からは、小委員会への参加と、事前アンケートへの協力についての謝意が示された。

(2) 副委員長・幹事の選出

灘岡委員長より、副委員長として古川委員、幹事として角田委員の提案があり、出席者が了承した。

(3) 議事要旨の提出に関する委員長一任について

灘岡委員長より、議事要旨の提出に関する委員長一任について説明があり、出席者が了承した。

(4) 小委員会委員間のメールアドレス共有について

灘岡委員長より、書面開催などに際して必要となる、小委員会委員間のメールアドレス共有について説明があり、出席者が了承した。

(5) SIMSEA および SIMSEA 小委員会の設立の背景・経緯の説明

山形委員より、資料1, 2を用いて、国際科学会議（ICSU）による持続可能な地球社会の実現をめざす国際協働研究プラットフォームである「フューチャー・アース（Future Earth）」のこれまでの経緯・概要や、SIMSEA の取組みについて説明が行われ、日本のイニシアチブへの期待が示された。これに対して、灘岡委員長から、SIMSEA の事務局体制や加盟状況、今後のメンバー国拡大や次世代・ジェンダーへの配慮や社会科学系メンバー追加の必要性についての補足説明が、また、植松委員から、ICSU のもとでの地域オフィスが閉鎖され、ISC（ICSU は国際社会科学協議会（ISSC）と 2018 年に合併し、国際学術会議（ISC）が誕生）の欧州オフィスに統括される方向であることなど、運営面での課題について補足説明があり、続いて質疑が行われた。

小笠委員からは、対象海域について質問があり、当初はインド洋（アラビア海を除く）から南シナ海～日本海～ベーリング海に至る縁辺海を対象とする構想で、太平洋島嶼国も入れていけるよう考えていたが、現状は南シナ海、東シナ海が中心となっているとの回答が山形委員よりあった。また、川辺委員からは、対象課題について質問があり、灘岡委員長より、早期警戒・予測システムの協力・構築に加えて、SIMSEA のタイトルに示されている縁辺海の持続可能性を実現させるべく、自然科学だけではなく社会科学も含めること、更に、科学者に限らない多様なステークホルダーとの関係を視野に入れる必要性が示された。更に、牧野委員から、他地域での類似イニシアチブについて質問があり、フューチャー・アースではアジア域のみとの回答が山形委員よりあり、牧野委員から、アジアからの発信の重要性についてコメントが行われた。

質疑を受けて、山形委員から、欧州中心のフューチャー・アースの流れに追随するのではなく、SIMSEA を発展させ、類似地域に展開していくことの重要性について、また、植松委員から、フューチャー・COAST という沿岸域の取組みとの連携可能性についてコメントがあった。

最後に、小笠委員により、一定の予算確保がなされている WESTPAC との関係性について質問があり、山形委員より、SIMSEA の発足時の PEMSEA や WESTPAC の代表との連携について回答があり、今後は、民間を入れながらステークホルダーを大きくしていくことの必要性が示された。更に、灘岡委員から、SIMSEA が担う地域イニシアチブは、グローバルとローカルを結ぶ結節点という位置づけであることへの期待が示された。その期待と運営面での現実のギャップを踏まえて、日本側から取組みが求められていることが示された。

(6) SIMSEA 小委員会の活動方針の議論・決定

灘岡委員長より、本議題に関連して行われた事前アンケート（資料3）への協力の謝意が改めて示された。アンケートを受けて、大型プロジェクトや国際プロジェクト、人材育成の必要性について灘岡委員長より説明があり、続いて古川副委員長より、PEMSEA で行われている SOC (State of the Coasts Reporting System) の取組みについて紹介が行われた。各国の海の状況を評価して横串を通すような取組みで、政策への反映が目指されている。SOC の評価項目は、行政で対応可能な項目のため科学的な深掘りが必要であり、科学面での SIMSEA との連携可能性について古川副委員長よりコメントが行われた。続いて、仲岡委員より、アジア域の活動全体をカバーすることは難しく、既存事業は一長一短という課題を踏まえて、これまでの取組みの状況について質問があり、山形委員が、シンポジウムの実施などについて回答するとともに、多国間の議論の難しさや、国のファンディングメカニズムの課題、民間資金の活用必要性などを示した。続いて、本小委員会が SIMSEA に関する日本のプラットフォームの役割になればという主旨を踏まえて、委員間の意見交換が行われた。主なポイントは次のとおりである。

- ✓ 社会全体に共通する問題解決型の取組みが重要である。共通の課題を、様々な機会を通じて吸い上げて情報共有し、ターゲット設定をしていくことも大切である。
- ✓ 公募が出た際に提案できるよう準備をしておくことが重要である。また、公募が出るのを待つのではなく、提案していくような取組みも大切である。
- ✓ 大型のファンディングが無いなかでも、若手科学者の現地との継続的な交流などを通して次の世代に繋いでいくなど、人材育成の面での仕込みも重要。また、ネットワークの構築も重要で、定期的な会合のほか、JPGU など学会との連携も視野に入れると良い。
- ✓ 多国間でやる場合には事業を管理・執行していける事務局の役割が重要である。
- ✓ 相手先の人材が必ずしも豊富ではないことも課題。誰と一緒にやるのが大切で、よい人と繋がるのが重要であるが、よい人は忙しくて限られている。既存の取組みと緩やかに連携しながらやっていくと良い。
- ✓ 国連海洋科学 10 年との関係で、具体的なプロダクトを作って、課題などを明らかにし

ながら進めていくことが大切。ただし、最初から、リージョナルレベルで実施すると失敗しやすく、プロダクトは、特定のフィールドや特定の対象（例：漁業だけ）から開始していくことが大切である。それら短期的な取組みを参照として拡大していくと良い。

- ✓ アジアの共通課題を踏まえることで、逆に、世界のなかでアジアがやるべきことを明確化できる。そこで、日本がイニシアチブをもって対応する方針が重要となる。
- ✓ 既に小さい取組みが各地で行われており、それらを統合していくような手法も考えられる。

最後に瀬岡委員長より、有益な議論への謝意が示されるとともに、既存の情報を上手く整理して、小委員会として共有し、ベースとなる情報として保持することの必要性が示された。

（7）今後の小委員会活動の進め方・大まかなスケジュール

コロナ後も含めて、当面はオンラインで開催すること、また、年間3～4回を目安に開催していく方向性が瀬岡委員長より示され、了解された。また、特定重点WGについては、小委員会に専門家をオブザーバとして招聘するなどの手法も含めて臨機応変に対応する方向となった。

以上